

こを去る事遠かるまじや南無阿彌陀佛」と。舞臺に入りワキに向ひて下居合掌す。

ワキ之を見て。「如何に翁。さても毎日の稱名に怠る事なし。されば志の者と見る處に。おことの姿餘人の見る事なし。誰に向つて何事を申すぞと皆人不審しあへり。今日はお事の名を名のり候へ」といふ。シテ答へて。「是は思ひもよらぬ仰かな。本より處は天さかる。鄙人なれば人がましやな。名もあらばこそ名のりもせめ。只上人の御下向。ひとへに彌陀の來迎なれば。かしこうぞ長生して。此稱名の時節にあふ事。盲龜の浮木優曇花の。花待ち得たる心地して。老の幸身に越え。悦びの涙袂にあまる」と面伏せ。又面上げて「されば此身ながら。安樂國に生るゝかと。無比の歡喜をなす處に。輪回妄執の閻浮の名を。又改めて名のらん事。口惜しうこそ候へとよ」といふ。ワキは重ねて。一つは懺悔ともなるべければ是非なのれと

いひ。シテは名のらて叶ふまじきかと又問ひ返し。ワキに急いで名のれと促がされて。さらば御前の人をのけられよと請ひ。元よも翁の姿は餘人の見る事なけれど。所望ならばのくべしと答へ。シテ立ちて近うよる心にて眞中へゆき下に居て。「昔し長井の齋藤別當實盛は。此藤原の合戦に討たれぬ。聞し召し及ばれてこそ候らめ」といへば。ワキ「それは平家の侍弓取つての名將。その軍物語は無益。只お事の名を名のり候へ」といふを。シテ打ち消して。「いやさればこそ其實盛は。此御前なる油水にて鬢髪をも洗はれしとなり。されば其執心残りけるか。今も此あたりの人には幻の如く見ゆると申し候」と語り。ワキ「さて今も人に見え候か」と不審し。シテ遂に源三位頼政の詠歌を引きて其心をあらはしたれば。ワキは忽ち曉りて。さては實盛の幽霊なるかと問ひ。シテは今更隠すに山なく。「われ實盛が幽霊なるが」と答へ。「人などがめそ假初に。あらはれ出でたる

實盛が。名をもらし給ふなよ」と。ワキに向ひ。「なき世語りも耻か
しとて」と面伏せ。「御前を立ち去りて」と正面直して立ち。「ゆくか
と見れば篠原の。池のほとりにて姿は」と仕手柱へゆき。「まぼろし
となりて失せにけり」と正面へ開き。返しに中入す。

中入

アヒ出づ

アヒ立ちて名乗座に出で。「何と今日も獨言仰せられたると申す
か。奇特なる事かな。参り不審申さうするにて候」といひてワ
キの前へ行き。「今日は怠り申して候」といへば。ワキ「何とて
今日は怠られ候ぞ」と問ふ。答へて「尤早々参り御手水なりと
も参らせうするを。叶はぬ用事の事にて怠り申し候。それにつ
きち上人様へ少し申したき事の候。在所のめんく申すは。い
つも日中の前後。獨言を仰せられ候間。いかやうなる御事にて
御座候ぞ。不思議なりとの申し事にて候」といへば。ワキ「何
と愚僧が毎日獨言を申す不審なりとの事にて候か」アヒ「中々

の事。」ワキ「それにつき少し尋ねたき事の候。古へ長井の齋藤
別當實盛の果て給ひたる子細御存じ候はゞ物語り候へ。」アヒ「是
は奇特なる事を御尋ね成され候ものかな。實盛の討死ありし御
事は。二百年には過ぎ候間。我等如きの者の存する事にては御
座なく候へども。古き人の申し傳へたる通り。物語り申さうず
るにて候」といひて。その戦死の有様を語ると。ワキ「ねんご
ろに御物語り祝着申して候。尋ね申す事餘の儀にあらず。愚僧
毎日説法の折節老人一人來り。毎日聽聞致され候間。如何なる
者ぞと尋ねて候へば。我實盛が幽霊なりとて。是なる池の邊に
て姿を見失うて候間不審に存じ。かたぐに尋ねる事にて候よ」と
語り。アヒ「是は奇特なる事を承り候ものかな。それは疑ふ
處もなき。實盛の亡心にて御座あらうするにて候。毎日有難き
御法談を遊ばされ候間。浮みたく思召し。姿をまみえ詞をかは
能のまをり 四の巻

出端にて
シテ出づ

されたと存ずる。左様に思召し候はゞ。いよく實盛の御跡を。ねんごろに御吊ひあれかしと存じ候」と述べ。それより實盛追吊のため臨時の念佛おこなはるべきよしを觸れ示して入る。ワキの謠すみ太鼓打ち出して稱名の文句あり出端となる。シテ舞臺に入りて開き。「極樂世界に行きぬれば。長く苦界を越え過ぎて」と歌ひ。「輪廻の故郷隔たりぬ」と橋掛の方を見。「歡喜の心いくばくぞや」と正面直して面少し下げ。「所は不退の所。命は無量壽佛となふ」と面上げ。「頼もしや」とワキに向ひ。「念々毎に往生す」と正面へ開き。「南無と謂つば」と左にて拍子ふみ。「即ち是れ歸命」と地うたひ。「阿彌陀といつば」と右にて拍子ふみ。それより角とりて廻り。仕手柱にかへりて。「有難や」と又ワキに開く。ワキより問ひ掛けてシテとの問答かずくありて。「燈の影と詰足し。「暗からぬ夜の錦の直垂に」と正面へ開き据拍子ふみ。「崩黄にほひ

の鏡着て」

と出て、

開き。「黄

金作の太

刀刀」と

腰なる太

刀を見。

「今の身

にてはそ

れとても」

と拍子ふ

み。「何か

實の。池



の蓮の臺こそ資なるべけれ」と。右の袖あしらひてワキの前へ行き。袖返し左足引きてワキをとくと見。左に廻り仕手柱へ歸りて小廻りワキへ開き。「それ一念彌陀佛即滅無量罪」のクリ歌ひながら真中にゆき。床几にかゝる。

最期の戦
なかつたる

それより「さても篠原の合戦破れしかば」とカタリになりて。「源氏の方に手塚の太郎光盛。木曾殿の御前に参りて申すやう。光盛こそ奇異の曲者と組んで首取つて候へ。大將かと思れば續く勞もなし。又侍かと思へば錦の直垂を着たり。名のれくと責むれども遂に名のらず。聲は坂東聲にて候と申す。木曾殿あつばれ。長井の齋藤別當實盛にてやあるらん。然らば鬚の白髪たるべきが。黒きこそ不審なれ。樋口の次郎は見知りたるらんとて召されしかば。樋口まゐり唯一目見て」と下を見。「あなむさんやな。齋藤別當にて候ひけるぞや」と面直し。「實盛常に申しは。六十に餘りて軍をせば。若殿原

と争ひて。先をかけんも大人氣なし。又老武者とて人々に。侮られんも口惜しかるべし。鬚を墨に染め。若やぎ討死すべきよし。常々申し候ひしが。誠に染めて候」と又下を見て。「洗はせて御覽候へと」と扇ひらき。「申しもあへず首を持ち」と。膝つき首を持ち上ぐる心にて扇を両手に持ち。「御前を立つてあたりなる」と立ちて正面先へ出で。「此池波の岸に臨みて。水の緑も影うつる」と。扇右へ抱へるやうに寄せて水の面を見。「柳の糸の枝垂れて」と指し廻して柳を見わたり。「氣晴ては風新柳の髪をけぶり」と拍子ふみ。「氷きえては波舊苔の」と膝つき。「鬚を洗ひて見れば」と。左の手にて首の鬚をつかみ。右の手に持ちたる扇にて。池水をすくひては掛けく。鬚を洗ふ形ありて。「墨は流れ落ちて」と。扇にて右の方へ低く指し廻しつゝ流れゆく方を見まくり。「もとの白髪とぞなりにける」と。髪持ちたる手をきつと見てイウケン扇をなし。全く疑の晴れたる心を示し。

首を洗ふ

ふくせを舞

「げに名を惜しむ弓取は。誰もかうこそ有るべけれや」と右へ廻り。
 「あらやさしやとて」と打合して。「皆感涙をぞ流しける」と指し廻し。
 感涙を流したる満座の士卒を見渡す形あり。是までは實盛の首とられたる物語なりしが。是より前に立ちかへり。錦の直垂の謂れを述べてクセとなる。即ち舞グセなり。
 「又實盛が。錦の直垂を着る事。私ならぬ望なり」と拍子一つ踏み。
 「實盛都を出てし時。宗盛公に申すやう。故郷へは錦を着て。歸るといへる本文あり」と出て、開き。「實盛生國は。越前の者にて候ひしが」と拍子ありて。「近年御領に附けられて。武藏の長井に。居住仕り候ひき。此度北國に。罷り下りて候はゞ。定めて討死仕るべし」と。角取りて左に廻り眞ン中にて正面へ開き。「老後の思出これに過ぎじ。御免あれと申し、かば」と。右へ廻りて笛座前より眞ン中へ出て。「赤地の錦の。直垂を下し賜はりぬ」と。左右して扇開き前に出

ロンギ
有て又
様軍の
なまの

だし。「然れば古歌にも、みぢ葉を」と歌ひながら上扇をして開き。
 「分けつゝゆけば錦着て。家に歸ると。人や見るらんとよみしも。この本文の心なり」と。例の如く大左右打込などありて。「されば古の朱買臣は。錦の袂を會稽山に翻へし」と。一つ廻りて左の袖かへしドンと拍子ふみ。「今の實盛は。名を北國のちまたにあげ」と角へさし。「隠れなかりし弓取の。名は末代に有明の」と。廻り來りて扇左の肩へ上げて有明の月を見。「月の夜すがら。懺悔物語申さん」と。ワキに向ひて留め。打切にくつろぐ。
 ロンギよりは又その最期の軍語にかへりて。地の謠の間に仕手柱に出で。「その執心の修羅の道。めぐりくゝて又こゝに」と開き。「木竹と組まんとたくみしを」と拍子ふみ。「手塚目に隔てられし」と。扇横にして突き出だし。「ひねんは今にあり」とイウケンをなし。地「つく兵たれくと。名のる中にも先づ進む」と。笛座の前より目附

柱はしらの方に敵を見て「手塚の太郎光盛」と開き。地「郎等は主しゅを討たせじ」と。右へ廻り。シテ「かけ隔たりて實盛」と行きかゝり。地「押し並べて組む處を」と。刻拍子くまひふみながら目附柱に向ひ。シテ「あつばれおのれは日本一の」と胸ざしゝて開き。「剛がうの者とくんでうずよとて」と六拍子ふみ。「鞍くらの前輪まへわに押しつけて」と。扇を敵の心にて兩手上げ膝まで引きつけ。「首くびかき切つて捨て、んげり」と。扇を疊み刀になして。要かなめの方にて首かき切る形をなし。角かくへゆきて前の方へ打ち捨てゝ。「其後手塚の太郎」と左へ廻り。「實盛が弓手ゆんでに廻りて。草摺くさずりを疊み上げて。二刀ふたやなぎさすところを」と。正面へ出て下り。左の腰の處を見て。「むづと組んで。二疋が間まにどうと落ちけるが」と。正面へ行きかゝり。兩手組みそりがへりして膝を突き。「老武者らうぶしやの悲しさは」と歌ひて直し。「軍いくさにはしつかれたり」と立ちて。「風かぜにちよめる枯木こぼくの力も折れて。手塚が下したになるところを」と。

扇あふぎにて指し廻しながらたじくと下り。臥膝ふたひざして安座あんざし。「郎等は落ちあひて」と橋掛はしかけの方を見。「つひに首をば掻き落されて」と扇あふぎにて頭かぶを指し。「篠原しのはらの土となつて。影かげも形かたちもなき跡あとの。影かげも形かたちも南無阿彌陀佛なむあみだぶつ」と。立ちて正面へ指しゆき。右へ廻り仕手柱しでじゆうにて小廻りこまわし。「とむらひてたび給へ」とワキへ合掌がっしやうし。留とどは例れいの如く袖返そでかへし拍子ひたしあり。

景清

作物 薬 尾

シテ 悪七兵衛景清

面景清 沙門帽子 鬘斗口 水衣

腰帶 扇 杖

ツレ(ヒメ) 息女人丸

能のまなり 四の巻

女面 葛 葛帯 唐織着流

トモ 男

素袍上下 常扇

ワキ 里人

素袍上下 常扇

平家の侍悪七兵衛景清は日向に流されて盲目となり。剃髪して日向の勾當と改名し。食を旅人に乞ひてあはれなる老の月日を送りぬける。がその落胤なる人丸といふ娘尋ね來りしに。景清は我身のあまりに落ちぶれたるを耻ぢて父なりと名のらざりしを。里人つひに引き合はせて面會させ。父は八島の軍物語などして後。泣くく互に別るゝ事を作れり。シテは落ちぶれても名士の果。老い衰へたりといへども雄心いまだ灰とならざる處なるべからず。なみくのシテにては企て及ぶべき能にあらざる

作物出づ

出づ
ヒメトモ

シテ話し
出だす

べし。太鼓なし。季節知られず。地は日向。噺子方座に着くと。藁屋の作物に引廻かけて大小前に出だす。此中にシテ入りて出づるなり。

ヒメを先にしてトモ出で。舞臺にて向き合ひ次第を歌ひ。ヒメ「是は鎌倉龜が江が谷に。人丸と申す女にて候。さても我父悪七兵衛景清は。平家の味方たるにより。源氏に憎まれ。日向の國宮崎とかやに流されて。年月を送り給ふなる。いまだ習はぬ道すがら。物うき事も旅の習。又父故と心づよく」と述べて。父を尋ねて遙々旅立つよしをいひ。二人同吟の下歌上歌には。相模の國を出立し。遠江參河を経て下るよしの文句ありて。トモの詞にて日向の宮崎に着きたるを知らせ。こゝにて父御の御ゆくへを尋ねんとて。ヒメは脇座へ。トモは其次へ下に居る。

作物の中よりシテ「松門獨り閉ぢて。年月を送り」と述懐の心を語り

龍のまをり 四の巻

出だす。その調子。もとより老人にして愁を含みたるなれば。低く沈みてあるべきなれど。低きに過ぎては人に聞えず。人には聞えて十分に低く沈みたる如く思はするは。容易からざる事なるべし。されば苟しくも此謠を心得たる人は。松門の出とて難所とするは此處なり。

トモ景清のありかを問ふ

かくて「衣寒暖に與へざれば。膚はげうこつと衰へたり」と。慨嘆に堪へざる心を述べて地となり。「とても世を背くとならば墨にこそ」と静に引廻るゝと。中には盲目の面に沙門帽子したるシテ。安座して伏目の姿になりて居り。打ち見るより早あはれなり。初同の謠さるゝと。ヒメ立ちて。誰住むべくも見えぬ庵の内に聲の聞ゆるは。もし乞食のありかかと不審し。シテは「秋さぬと目にはさやかに見えねども。風の音づれいづちとも」など獨語し。トモは藁屋の中に向ひて「流され人のゆくへや知りてある」と問ふ。シテ之

シテ獨語す

トモ又里人に景清を問ふ

をさして流され人の名字はと問ひ返し。トモ悪七兵衛景清なるよしをいへば。げに左様の人は承りたれども。盲目なれば見る事なし。くはしくはよそにて御尋ね候へと言ひ放つ。よりて二人は之を賊と思ひ。奥へゆきて尋ねんとて。ヒメもトモも後見座にくつろぐ。シテ此に於て獨語す。只今の者を何者ぞと存じたれば。一とせ尾張の熱田にて遊女と相なれ生ませたる子なりしが。女子なれば用に立たずと思ひ。鎌倉龜が江が谷の長にあづけ置きしに。長をばなれぬ親なりと悲しみて。こゝまで慕ひ來りしならんと。「聲をば聞けど面影を。見ぬ盲目ぞかなしき。名のらて過ぎし心こそ。中々親のさづなれ。く」の地の謠。シテの裂けんとする心中をいひつくして餘あり。されどシテ未だ泣かず。見物人すてに涙を浮べつ。トモはヒメと共に橋掛にゆきて里人を呼ぶと。幕あがりてツキ出て何の御用ぞと問ふ。景清のゆくへを問へば。只今御出て候山陰の葉

屋に人は候はざりけるかと又問ふ。薬屋には盲目なる乞食こそ居りたれといへば。それこそ御尋の景清候よと聞きて。ヒメは打ちしをる。之を見てワキは何故ぞと不審し。トモは其息女なるよしを告げ。ワキは更に詞をつゞけて。景清は兩眼しひまし／＼て髪をおろし。日向の勾當と名をつき給ひて食を旅人に乞ひ。我等如きのあはれみによりて命を継ぎ居給ふよしを委しく語り。推量するに昔に引きかへたる有様を耻ぢらるゝが爲め。御名のりなきなるべしとて。ワキ先に立ちてかの薬屋に伴ひゆき。「なふ／＼景清の渡り候か。悪七兵衛景清の渡り候か」と呼びかくればシテ耳を押さへて。「かしまし／＼さなきだに。故郷の者として尋ねしを。此しぎなれば身を耻ぢて。名のらて歸す悲しさ」と。一たびは苦みてワキに呼ばれしを厭ひ。一たびは故郷の人を思ひいでしを／＼としたりしが。更に氣を張り聲を大にして。「今は此世になきものと。思ひ切つたる乞食を。悪七

ワキ景清を呼ぶ

シテ立腹

兵衛景清なんどい。呼ばゝこなたが答ふべきか」と言ひ切り。「むかしに歸る己が名の。悪心は起さじと。思へども又」と右の手にて膝を打ち。いかにも疥癩にさはりたる躰にて、「腹たちや」と面直す。「所に住みながら」と非を悔いたる心にて和らかに歌ひ。「御扶持あるかた／＼に。憎まれ申すものならば。ひとへに盲の杖を失ふに似たるべし」と。右左右と杖を探る形をなし。「かたはなる身の癖として。腹あしくよしなき言事。たゞ免しおはしませ」と。ワキに合掌して謝罪す。天真爛漫たる景清の心情。寫しつくして漏らすなし。「目こそ暗けれど」と歌ひながら正面へ直し。「山は松風。すは雪よ」と左の方見上げて松風を心に聞き。「見ぬ花の。さむる夢の惜しさよ」と。正面直し面曇らして少し愁を含み。「さて又浦は荒磯に」と。右の柱につかまりて居立ち。「よする波も」と面下げて。「聞ゆるは」と耳傾け波の音を聞く心あり。「夕沙もさすやらん」と面直し。「さすが

ナシテ謝罪

に我も平家なり」と杖さぐり持ちて立ち。藁屋を出て、「物語はじめて御慰みを申さん」と。脇正面の方に居るワキに向ひ打ちすわる。全く機嫌なほりて今までの過言をわぶる心なり。

ワキは我等より以前に景清を尋ねたる人はなかりしかと問ひ。シテはあらずと答へ。ワキそれは偽りなりとて。之まで息女を連れて來りし事を告げ。急いで御對面候へとヒメにいへば。ヒメは立ちて。

「なふみづからこそ是まで参りて候へ」と歌ひながらシテの側へ行き。左の袖をとらへて。「恨めしや遙々の道すがら、雨風露霜を凌ぎて参りたる志も。いたづらになる恨めしや。さては親の御慈悲も。子によりけるかや情なや」と打ち泣く。シテ「今までは包み隠すと思ひしに。あらはれけるか露の身の。置所なや耻かしや」と面伏せ。「御身は花の姿にて。親子と名のり給ふならば。殊に我名もあらはるべしと。思ひ切りつゝ過すなり。我を恨と思ふなよ」と。右の手にて

ヒメ父に詞をかかく

探りつゝヒメの袖をとらへ。地になりて。「あはれげに古は。疎き人も訪へかしたて。恨みそしる其むくいに。親しき子にだにも。訪はれじと思ふ悲しさよ」と。袖を放し打ちしをる。

「一門の舟の内」の謠すみて。ワキ「あら痛はしやまづかう渡り候へ」といひ。ヒメはもとの座に歸り。ワキも地の前に座し。御娘御の御所望なりとて。シテに八島にての御功名のやうを語りて聞かされよと請ふ。シテは承諾して。是まで遙々來りたる志がふひんなれば。語つて聞かすべしと答へ。此物語すみたらば彼者を故郷に歸して給はれとワキに頼む。

かくてシテは扇を持ちて正面むき。「いで其頃は壽永三年三月下旬の事なりしに」と語り始め。教經に最期の暇乞して陸に上れば源氏の兵の駆け向ひ來りし事を述べ。地になりて。「景清これを見て。ものものしやと夕日影に。打物ひらめかいて。切つてかゝればこらへず

シテ軍語をなす

して」と。扇を刀にして右の肩より左の肩より切り拂ふ形をなし。
 「はむいたる兵は。四方へばつとぞ逃げにける」と。左右に面使ひ。
 「さもうしや方々よ」と正面に直し。「源平互に見る目も耻かし」と
 右の方受けて見。「一人を留めん事は。案の打物小脇にかいこんで」と
 と。右の手に刀ぬき放したる心にて左の手を添へ。「手取りにせんと
 て追うてゆく」と。左の手を前に出だして追ひかくる心を示し。「美
 保の谷が着たりける。兜の鏝を取りはづしく」と。左の手を差し
 伸ばして。二度つかみはづし。「二三度にげのびたれども。思ふ敵な
 れば逆がさじと」と。扇ひらきて左に持ち。「飛びかゝり兜をおつと
 り」と扇を伏せ前へ手一ぱいに出だし。「えいやと引く程に。鏝は切
 れてこなたに留まれば」と。引き切る心にて扇をばたりと膝に引き
 付け。尻居にどうと倒れたる心にて安座し。「主は先へ逃げのびぬ」と
 と正面を見やり。「はるかに隔てゝ立ちかへり」と扇腰にさし。「景清



は美保の谷が。首の骨こそ強けれど」と。左の手あげて首を指し。
 「笑ひて左右へのきにける」と。打合してヒメの方に向ひ。打切ありて。「昔忘れぬ物語。衰へ果てし心さへ。亂れけるぞや耻かしや。此世はととも幾程の。命のつらさ未近し」と正面にて。「早立ち歸り亡き跡を」と右の手にてヒメへ指し。「どむらひ給へ盲目の」と。ワキへ向ひ。「くらさ處のともし火。あしき道橋と思ふべし」とシテ杖をさぐり持ちて立ち。ヒメもトモもワキも立ち。シテは少し仕手柱の方へ行き。立ち歸る時ヒメの橋掛の方さして來かゝるに行きあたり。左の手をヒメの肩に掛け。別れの詞を述ぶる心にて。「さらばよ留まる」とヒメを見。「ゆくぞとの」とヒメははづして橋掛へゆき。ワキもトモもシテの後を通りて。ヒメの跡より樂屋に入り。シテは残りて。「只一聲を聞き残す。是ぞ親子の形見なる」と橋掛を見おくりたる後。脇正面の方に直して。返しにシヲリドメとなす。あはれなる

父子生別

シテリ留

能なり。こゝに一つの面白き話を思ひ出でたるは。一番の能すみ。シテの形をはりて謠切たる後。シテの猶橋掛を引きつゝあるにも拘はず。見物人は一同に座を立ち雑話をなしなどして。誰も幕に入らるまで見送るものなきが常なるに。先年名優尾上菊五郎が芝の能樂堂にて。寶生九郎の景清を見たりし時。満場どよめき騒ぐを苦々しとや思ひけん。自身はいと靜肅にシテの橋掛を歸る處に眼を注ぎたりしが。幕あるや如何にも感服せし如く。獨り拍手して置かざりしは。側にて見物しむたる己まで愉快に堪へざりき。あはれ此後もかゝる見物人もがな。

野守

作物塚

前ジテ 野守の翁

龍のまかり 四の巻

笑尉 尉鬘 鬘斗目 水衣 腰帶 扇 杖
後ジテ 鬼

小堀見 赤頭 唐冠 厚板 中切 法被
腰帶 打杖 鏡

ワキ 山伏

兜巾 厚板 大口 水衣 蓑懸 腰帶
小サ刀 イラタカ数珠 扇

アヒ 處の人

狂言上下 扇

山伏ありて春日野を過ぎしに老人ありて野守の鏡の古事を語り。誠のは鬼の持ちたる鏡なるを。見給はん事は叶ふまじとて塚の内に入りけるが。忽ち鬼神の姿と變じて出て來り。鏡に天地東西南北の世界などうつして見せたる後。大地を踏み破つて那落

作物出づ

次第にて
ワキ出づ

一聲にて
シテ出づ

の底に入るといふ事を作れる能なり。鬼事とて多くは切の能に用ひらる。太鼓あり。季節は初春。地は大和。囃子方座に着くと塚の作物を大小前に出だす。引廻かゝりて頂には柴をさしたり。

次第にてワキ出で「昔に露けき袂にや。く。衣の玉を合むらん」と歌ひ。「是は出羽の羽黒山より出でたる山伏にて候。我大峰葛城に参らず候程に。此度和州へと急ぎ候」と名のり。道行あり着ゼリフありて。人を待ち此あたりの名所をも尋ねばやと存ずるよしを述べ。脇座にゆき下に居る。

一聲にてシテ杖をつきながら出で。「春日野の飛火の野守いで、見れば。今いくほどぞ若菜つむ」と歌ひ。サシにて是は此春日野に年を経たる野守の翁なるよしを歌ひ。春日の神徳の有難き事。三笠山の古事などいひて立ち居ると。ワキ詞を掛けて御身は此所の人かと問

能のまをり 四の巻

野守の鏡
の影を問

ふ。シテ此春日野の野守なるよしを答ふ。ワキこれによしありげなる水の候は名水なるかと問ふ。シテ是こそ野守の鏡と申す水なりと答ふ。その謂れを問へば。我等如きの野守の。朝夕影をうつすによつて名づくともいひ。又は鬼神の持ちたる鏡の事なりとも承り及べりと答ふ。何とて鬼神の持ちたる鏡を野守の鏡と申すぞと問へば。シテ「ひかし此野に住みける鬼のありしが。晝は人となりて此野を守り。夜は鬼となりて是なる塚に隠れ住みけるとなり」と作物を見上げ。「されば野を守りける鬼の持ちし鏡なればとて。野守の鏡とは申し候」といひ。ワキの答ありて。シテ「又は野守が影をうつせば。水を野守の鏡といふ事。」ワキ「兩説いづれも謂れあり。」シテ「野守が其名は昔も今も。」ワキ「かはらざりけり。」シテ「御覽せよ」と請ふ。足し。「影をうつしていと猶」と右を受け。「老の波は眞清水の。あはれげに見しまゝの。昔の我ぞ戀しき」と正面出て、「げにや慕ひ

ワキ又答
の事

ても。かひこそなけれ古の」と左に廻り。「年ふるき世のためしかや」とワキへ向ひて留め。返しに正面直す。ワキ又「箸鷹の野守の鏡とよまれたるも。此水に就きての事にて候か」と問ふ。シテ「さん候此水につきたる謂れにて候。語つて聞かせ申し候べし」とて眞中にゆき下に居て。「ひかし此野に御狩のありしに。御鷹を失ひ給ひ。かなたこなたを御尋ねありしに。一人の野守参りあふ。翁は御鷹のゆくへや知りてありけるぞと問はせ給へば。かの翁申すやう。さん候是なる水の底にこそ御鷹の候へと申せば。何しに御鷹の水の底に有るべきぞと」と。杖逆手に持ちて立ち。「狩人ばつと寄り見れば」と正面先へ出て。「げにも正しく水底に」と左の手を杖にかけてとくと下を見。「あるよと見れば白斑の鷹」と少し下りて杖つき。「よくく見れば」と又正面へ出て。「水にうつれる影なりけるぞや」と下を見。「鷹は木居にありけるぞ」と下り。杖

両手にて胸につき。右の上に鷹の居る心にて見上ぐ。打切にくつろぎて仕手柱に立ち。「さてこそ客鷹の。野守の鏡得てしがな。思ひ思はず。よそながら見んとよみしも」と。静に正面へ出て。「木の鷹をうつす故なり」と語る心にてワキへ向ひ。それより左へ廻りて。「老の思出の世話を。申せば進む涙かな」と又ワキへ向ひ。返しにしをりながら正面直す。

ロンギ

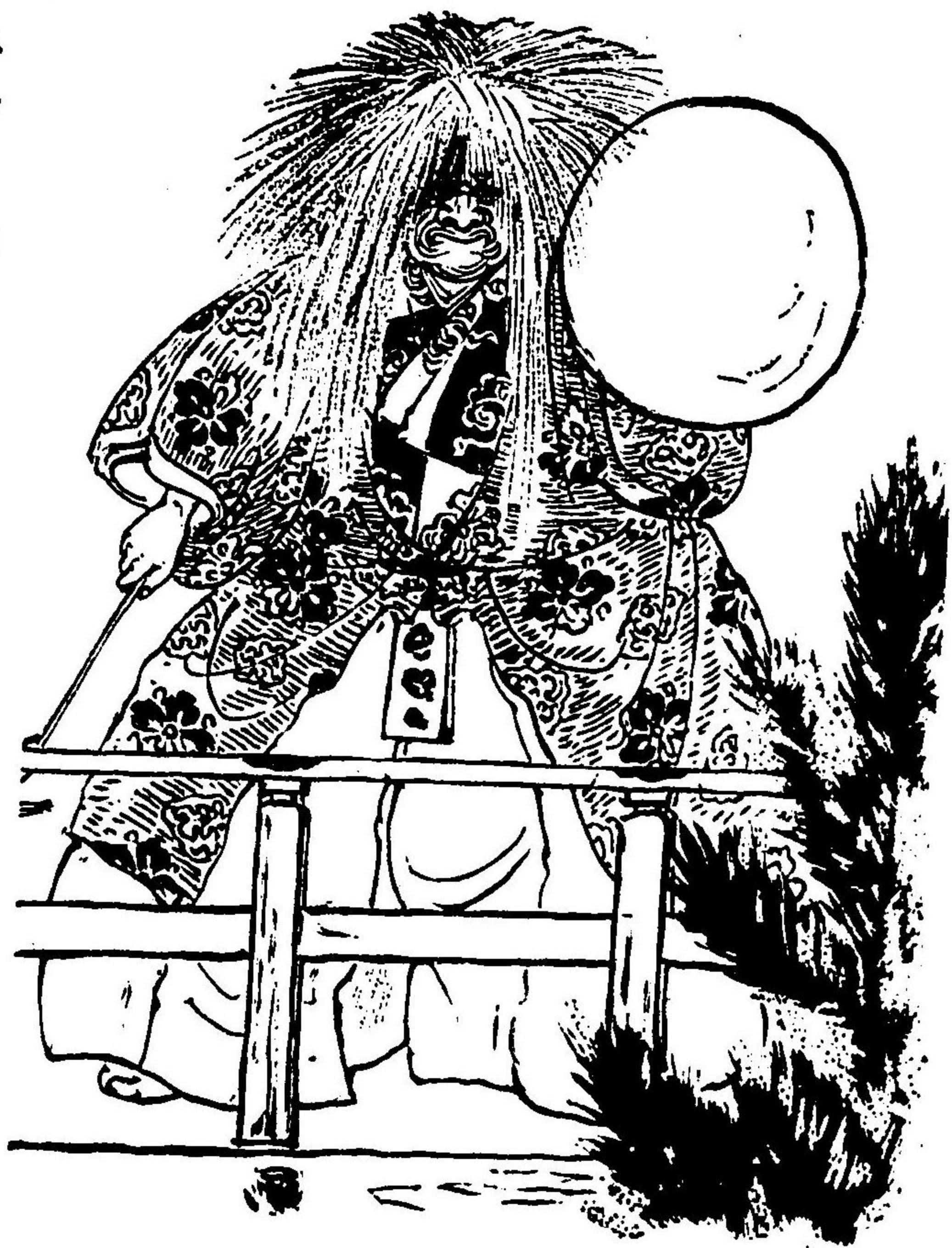
中入

打切に真ん中にゆき。杖下に置き扇持ちて座し。ロンギは別にかはる事なく。「凝はせ給ふかや」とワキに向ひ。「誠の鏡を見ん事は」と立ち。「かなふまじろの鷹を見し。水鏡を見給へとて」とワキへ開き。「塚の内に入りにけり」と又正面に開き。返しに作物に中入す。

此ところ作物に中入せずして幕に入るもあり。其時は作物を出ださずして後ジテも幕より出づるなり。

アヒは語間にて前ジテのいひたる事を繰返すに過ぎざれば。其

文句をば
省さぬ。
ワキと問
答の末か
たる事例
の如し。
ワキの語
ありて。
「南無歸
依佛」と
和ふると。
出端にな
り。
作物



後シテ歌
ひ出す
作物より
出づ

の内よりシテ歌ひ出だし。地になりて「鬼神に横道曇りなく。野守の鏡はあらはれたり」と。作物の後より仕手柱に出て、鏡を高く上げ。向を照らさせながら開く。鏡は左に持ち。打杖を右に持ちたり。通例は赤頭に法被半切なれども。白頭にする事もあり。又黒頭にてモギドウの事もあり。作物なくして幕より出づる時は。一の松にて「あらはれたり」と飛び開くなり。作物なしにするは白頭などの習事に限る。

ワキ「恐ろしや打火か、やく鏡の面に。うつる鬼神の眼の光り。面を向くべきやうぞなき」といへば。シテ「恐れ給は、歸らんと。鬼神は塚に入らんとす」と。作物の方へ行きかゝるを。ワキに「暫く鬼神待ち給へ」と留められて正面直し。「台嶺の雲を淺ぎ。く。年行の功を積むこと一千餘箇日」と。長拍子ふみ。角取り廻りて指し分けし。右に廻りて仕手柱にて小廻り開き。ワキの「東方」にて舞

舞動

働となる。

キリ

「東方降三世明王も此鏡にうつり」とシテ歌ひながら。鏡を高く上げて開き。「又は南西北方をうつせば」と鏡にうつしながら右へ廻り。「八面玲瓏と明らかに」と鏡にうつりたるを見廻し。「天をうつせば」と鏡を仰向け両手に持ちて。天を見ながら正面先へ出て。「非想非非想天まで限なく」と下に居て鏡の面を見。さて又大地をかぐみ見れば」と。鏡をうつむけ大地のうつるやうにして開き。「まづ地獄道の淨玻璃の鏡となつて」と。刻拍子多く踏みて。「一面八丈の資」と下りて飛び返り下に居て。「打つや鐵杖のかずく」と打杖にて右の方を二つ打ち。「ことく見えたり」と鏡の面を打杖にて指して救へ。「さてこそ鬼神に横道を正す。明鏡の資なれ」と。ワキの方へ出て飛び歸り臥膝して立ち。「すはや地獄ぞとて」と拍子ふみ。

能のまかり 四の巻

「大地をかつばと踏み鳴らし」と角へゆきて左にて乗り込み「すはや」の返しに脇座の前へ來り。「大地をかつば」と又右にて仕手柱へ乗り込み。「那落の底にぞ入りにける」と飛び返り。袖かづきて下に居。直に立ち拍子ふみて留むる。白頭などの時には。「踏み破つて」と舞臺の真ん中邊に乗り込み。大小前の方へ下りて兩座上げ安座して。残留にしたるをも見し事あり。

能の葉四の巻終

明治三十六年九月五日印刷
 明治三十六年九月八日發行

能の志をり四の巻

定價金四拾錢

著者

大和田建樹

東京市日本橋區本町三丁目八番地

發行者

大橋新太郎

東京市京橋區四軒屋町廿六七番地

印刷者

石川金太郎

東京市京橋區四軒屋町廿六七番地

印刷所

株式會社 秀英舍

版權所有

發兌元

東京市日本橋區本町

博文館

96
185

大和田建樹先生著

(再版)

歌まなび

全一冊
中判
頗美本

洋布金字入 正價壹圓五拾錢
紙數約千卅頁 郵稅拾六錢

歌は文學の最も高尚なるものなり、月夕花晨一たび之を詠すれば美感踊躍其快實にいふべからず、而して世に作歌の指南書多しと雖も、或は繁に過ぎ或は簡に失し其中庸を得たるもの少し、「布留の山踏」「和歌初學」の如きものあれども、既に陳腐に歸せんとするの今日、此書の出でたる、和歌初學者の暗夜を導く燈明とも謂つべし、部類は四季雜に分ち、題毎に懇切なる説明を附し、用語用句を列舉し、尙卷尾に豊富なる古今名家の作例を掲げて其の模範を示せり

(版一十)

散文雪月花

洋紙袖
裝皮珍

▲正價參拾五錢 郵稅六錢

其文は清楚婉麗、趣味掬すべく、其歌は優雅流滑、奇想天外より來りて、句々風を生じ、言々花を降らすものは、大和田先生の筆となす。此編收むる所、無慮二百篇、蓋し落裏振はざる今日の文學界中に旗鼓たるものは、此書を措きて他に又た何かある。

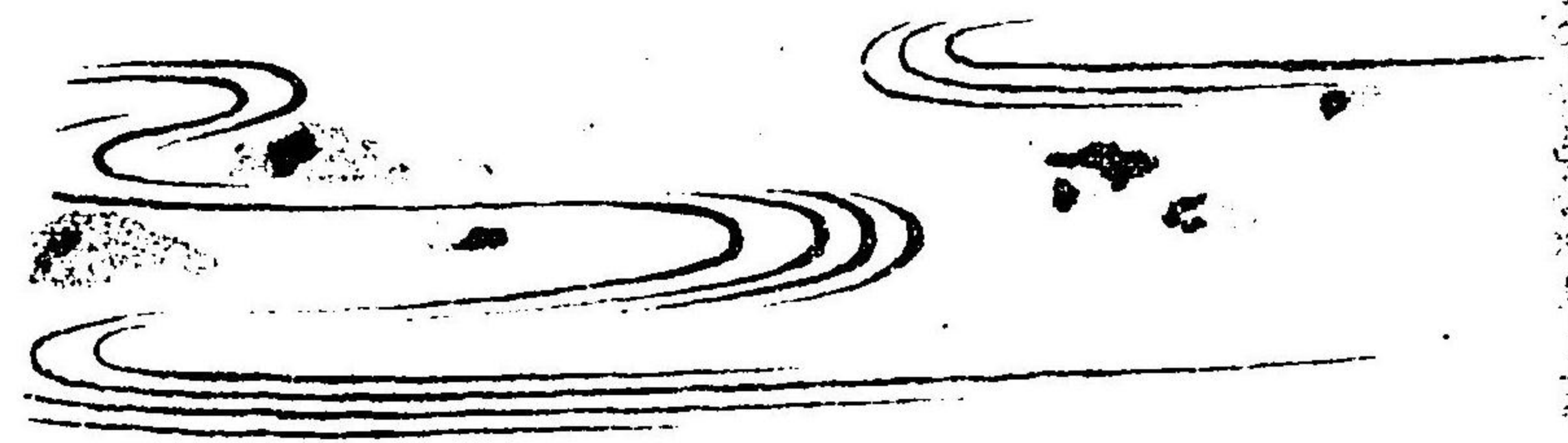
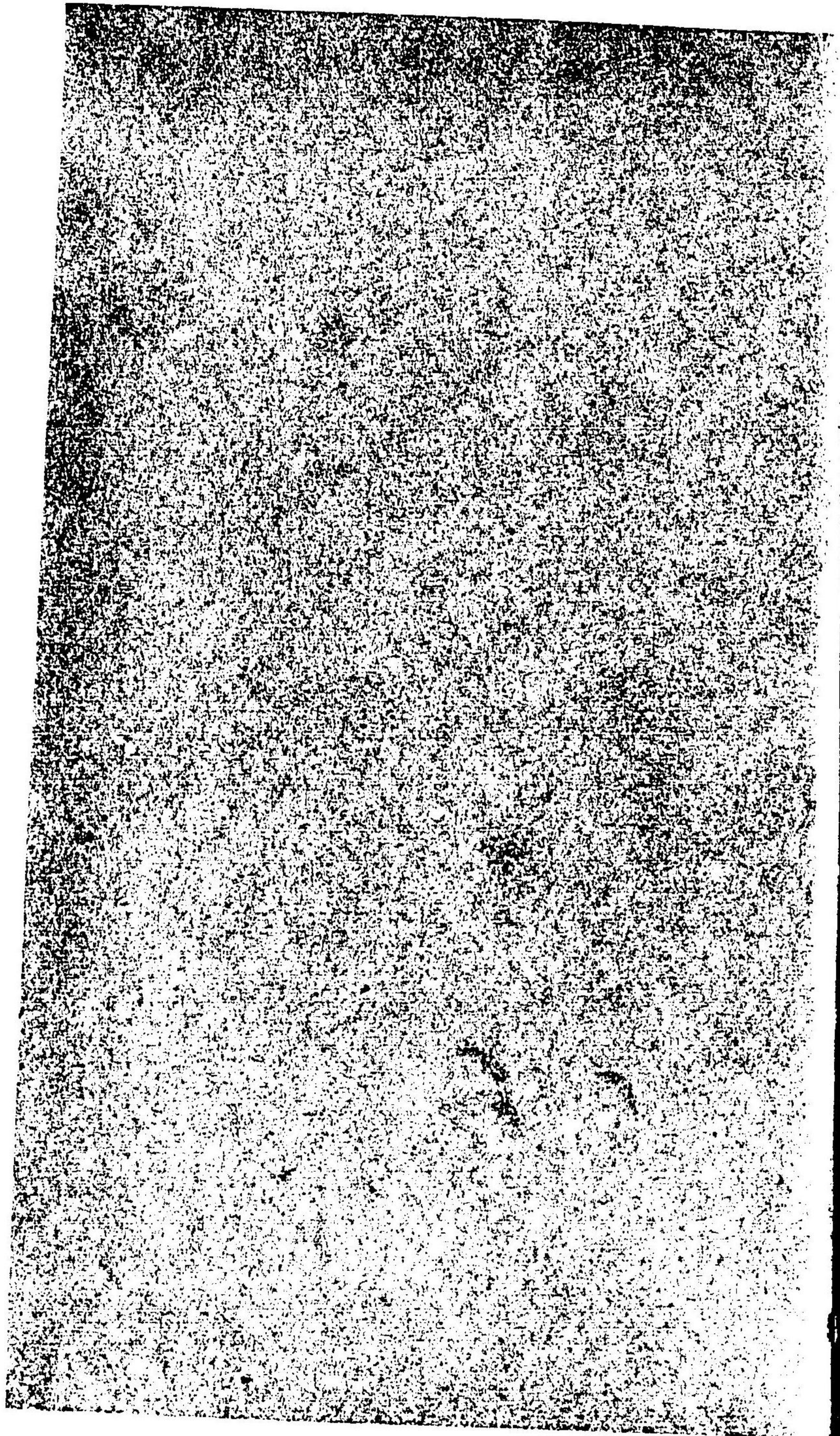
(版三)

散文深山櫻

洋紙袖
裝皮珍

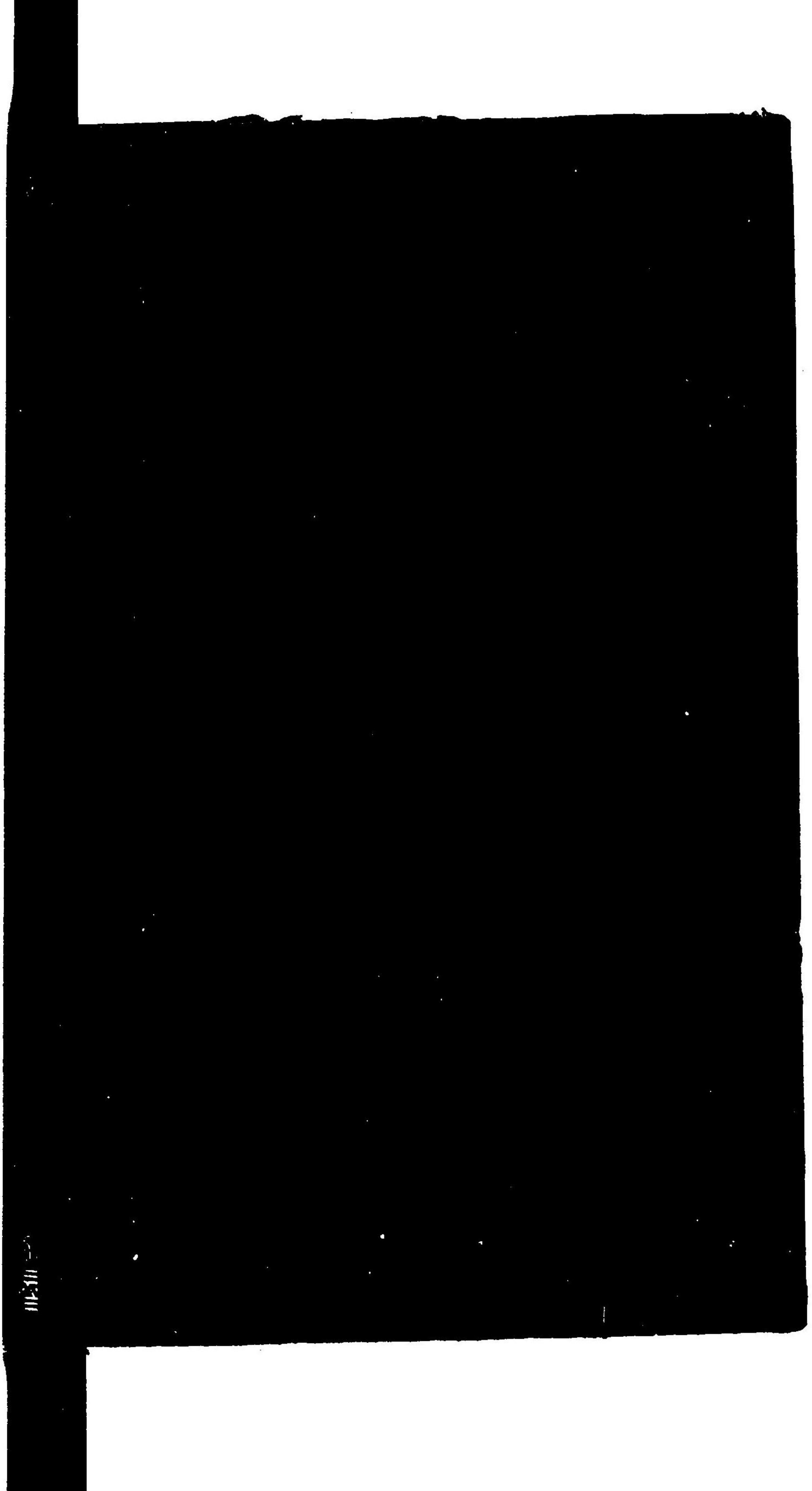
▲正價四拾錢 郵稅六錢

著者大和田先生が文學に深く措辭に妙なるは世既に定評あり、今此書は新作の散文韻文二百二拾餘篇を輯めたる者、一たび之を繕かば、櫻の山に分入りて清香衣襟に滿つる如く讀者をして、手を放つ能はざらしむるの妙あるべし。



84 行 誼 館 文 博

96
185



11-311



1191

1191

